

# 冬の夜がたり

山村雅治

嵐のさいちゅうに嵐の話をしてもしようがないから

さりとしていまのぼくらの変てこな状態について喋べることは

おたがいの傷口を疼かせることにしかならないし

もしきみがその痛みにいつも囚われていたいと言うならばつだけど

ぼくはそんなことは真平なんだ

だから 今夜はひとりの男の話をしよう

この怖い空の下でだれにも妨げられずに眠っている

しずかでみじめな男の話を

出だしはこうだ

檻の中で眠る

解放の刻を知らず眠る

汗と苔に覆われた

囚われの男

彼を覚ますには

ある酷薄な震動が必要なのだ

一度目 彼を追放した

二度目 鏡を破砕した

たといは

△神々の鞭▽のような

幾代にもわたって

祖先たちは彼の姿を目撃してきた

銅の時代 青銅の薔薇の蜜庫に

銀の時代 白銀の香炉の把手にぶらさがり

金の時代 黄金の乳房の女の吐く息に

彼はあらゆるひとの姿を映す鏡

ただし少し歪めて

失意の老婆には 恋文を読む若い娘を

夢想の少年には 乞食に蹴とばされる王様を

そして蜥蜴なら ひとりでに動くその尻尾

ほくもその男の姿を見たことがある

どこでって聞くのかい なにもとくべつな屋根の上にいるわけじゃない  
見るものはどこでも 閃光を見るようにやつを見る

ただ記憶の深い場所であとになって気づくんだ

俺は見た

朝の豚小屋の片隅で

蜘蛛の巣のえじきの囚われ人を

糞の湯気 虹の掌が包みこむ

水蜜桃の種の形の胴体を

腰のあたりに

一筋の陽ざしを浴びて

首をもたげる血のきのこ

みるみる膨み破裂した

くらげの毒が泌みこむ気球になった

夜の修道士の部屋で俺は見た

胡桃の板の机のわきに

碩子玉を叩く囚われ人を

底光りする孤立に比べ

生白く肥った豚の呆けづら

腰のあたりに

つめたい眼ざしに晒されて

萎えしほむ黒いひとの芯

一瞬にして燃えつきたのだ

俺は見た 朝の豚小屋の片隅で

分かるかい 飢えの傾け方のまちがいつてことがあるんだ

ぼくの見たその男はちよっとにんげん離れて内閉的な男だった

世間がやつを締めだしたのか やつが世間を遠ざけたのか

それは知らない しかしやつは鎖につながれるまえに

劇甚な暴力の発作に襲われたらしいってことは言えると思う

囚われ人は生き続ける

夢の中で

塩の嚙みを噛みくだけ

わずか三時間ばかりの

半生の棘を枷に嵌めて

彼は悲劇的なにんげん

その全生涯を要約する

悪夢の書物を紡ぎだす

たとえば

暴力と

逆流する暴力

断ち切ることができない

火の輪廻について

胎内で

父母と

我が身を滅ぼす

嬰兒の微笑について

あるいは

別れのきびしさ

忍び得ず

死んだ男の後を追う

女の孤愁について 云々

それがやつの自潰の正体だったんだ 殻に閉じこもって

自分を苛み世界を呪う 不毛の自潰が唯一のやつの生きる術だったんだ

ほらアンデルセンの△かたわもの▽ 足なえの子供の話に出てくる

猫に襲われる窮地の鳥籠 そいつが傍になかった子供だったってわけさ  
さてきみも同じく はははそりなんだ

これはいまだに古傷の痛みとしかつきあってない

あわれなきみについてのお話だったん だとさ

結末はこうなる このお伽話好きがつくる初めてのの大団円になるはずだ

鉄槌は下された

燃えたつ星が穿たれる

冬の沈まり

囚われ人を身ぐるみ揺さぶる

凄惨な悪夢のさなか

彼は戦う

水を斥く沙漠の意志をおし拵げ

喉締めあげる炎の蛇を踏みひしぎ

撥ねる力の衰えとともに

嘔吐の悪感が胸を突きあげ

彼は鞭打つ

切断された蜥蜴の尻尾の狂躁を

灰を掻く水鳥の自嘲 石の中を泳ぐ魚の涙  
そして激しく 寛容の絹の外被にくるまれた  
さかしらな猿のたわけた子宮の宙返りを

だが絶頂はなく

覆された虹色の兜

彼は癩病人と接吻しながら

その呪咀の舌を朗らかに呑み下した

やわらかな牡蠣の肉 泥の楽器

野の百合を歌う吟遊詩人が行き過ぎる

美しい朝だった

苦悶の汗も躰きの苔も削げおちた

そういうわけなんだ別れた女の迷いの霊よ

ぼくはきみとはつきあわない

いまはただ黙って さっさと立ち去って行ってくれたまえ